

# 「モンスターペアレント」の対応策に関する パラダイム転換

佛教大学研究員 齋藤 浩

## 抄 録

モンスターペアレントの対応策として、多くの自治体が苦情対応マニュアルの作成、対応専門チームの組織、弁護士や臨床心理士の活用等の手だてを取っている。だが、これら現行の対応策が、学校の現場の実態や教師のニーズにこたえたものかどうか、十分な検証が出来ていない。そこで神奈川県の小学校教育論524名に保護者の利己的な言動の様子や仕事に与える支障の程度等のアンケートを取ったところ、現行の対応策に対する課題が見えてきた。

それは「対症療法的で長期的な解決策ではな

い」等の課題である。学校と家庭とが更に信頼し合う対応策も必要だという傾向が見えてきたのである。そこで、連携及び融合の一つのモデルをコミュニティスクールに求め、全国の55の小学校に調査をしたところ、保護者の利己的な言動が減っている実態が明らかになってきた。

キーワード：モンスターペアレント、利己的言動、対応策、コミュニティスクール、スクールコミュニティ

## 1. はじめに

### (1) 研究の目的

「モンスターペアレント」という言葉の生みの親である向山洋一氏は、彼らを「今、学校で、不当、不可解な要求で暴れまわっている保護者は、これまで見たことも聞いたこともないような奇怪な存在」<sup>(1)</sup>と説明し、強い危機感を訴えた。こうした保護者の様子は、多くの学校で見られるようになり、各自治体も具体的な対応策を取らざるを得ないところまで来たのである。では、どのような対応策を取っているのだろうか。

具体的なものを見ていくと、苦情対応マニュアルの作成、対応専門チームの組織、弁護士や臨床心理士の活用等が主である。だが、これら

対応策は行政主体で考えられたものが多く、学校や教師の意見が完全に反映されたものであるとは言い切れない。そこで、学校現場の声を聞きながら、現行の対応策のどこに課題があるのか、それを明らかにしていく。

また、対「モンスターペアレント」用の対応策でなくても、出された課題に対応するであろう行政の他の取り組みを探し、それが結果として「モンスターペアレント」を減らす効果があるかどうか調査していきたい。一定の効果が見られるのであれば、現行の対応策に加え、更なる解決策として提言していくことが、本研究のもう一つの目的である。

## (2) 研究方法

①教師が保護者との対応で困難だと感じたこと、「モンスターペアレント」に対する現行の対応策の成果を知る手だてとして、神奈川県内の公立小学校の教師に対して、無作為でアンケート調査を行った。質問内容は、「保護者の利己的な言動に傷ついた程度、またその頻度」「利己的な言動増加と教師の仕事への支障との関係」「現行の対応策の課題」等である。このアンケート調査をもとに、現場の教師が保護者の利己的な言動の実態にどのような意識を持っているのかをまとめ、現行の対応策の課題を明らかにしていく。

②前述のアンケート調査の結果、「対症療法的で長期的な解決策ではない」等、現行の対応策の課題が出され、恒久的に保護者と教師が手を結び合えるような取り組みの必要性が指摘された。具体的な方法として尾木直樹氏は「自治体が動き出すのを待つのではなく、学校を保護者や地域の人々に開放し、誰でも気軽に参加できる拘束力の弱いスクールコミュニティを構築していくといった方法を取るのも有効です」<sup>(2)</sup>と述べている。

本研究においても、学校中核型対応策が更なる効果を生むという仮説のもと、平成20年4月1日までにコミュニティスクールの指定を受けた小学校のうち、平成21年度に文部科学省から調査研究の委託を受けた、全国の55校の小学校に制限応答式の電話インタビューを行った。質問内容は、「コミュニティスクールの取り組みと保護者の利己的な言動増減の関係」である。

## 2. 保護者の利己的言動や対応策に関する意識

現行の対応策が、現場の教師にどのような意識を持って受け取られているのかを知るため、教師が保護者の言動で傷ついたと感じた内容や

頻度、「モンスターペアレント」に対する現行の対応策の成果と課題についてアンケート調査を実施した。調査の概要と結果については、次の通りである。

### (1) 調査の概要

#### ①調査対象

神奈川県内の公立小学校に勤務する教諭  
回収率54%、有効回答524

#### ②抽出方法

無作為抽出法

#### ③調査方法

郵送による無記名自記式質問紙の配布、回収

#### ④実施時期

2008年12月から2009年3月

#### ⑤調査内容

「教師が保護者の言動で傷ついたと感じた内容や頻度」「保護者の利己的な言動増加が教師の仕事にどのような支障を与えるか」「現行の対応策が十分なものか」等の質問である。質問は選択肢が大半であるが、「現行の対応策の効果」について聞き、「いいえ」と回答した場合のみは、その理由を自由記述してもらうようにした。

#### ⑥用語の定義

本研究では、調査を実施するにあたり、「利己的な言動」の意味を、「対処に困るクレーム」「対処に困る要求」「クレームや要求を伴わないが対処に困る言動」を教師や学校に対してする、保護者の行為とした。

### (2) 調査結果

アンケート用紙においては、「東京大学大学院の学力問題に関する全国調査(2006)では、保護者の利己的な要求が深刻とする小学校教師の割合は77.8%であり、Benesse教育研究開発センターが実施した教員勤務実態調査(2007)でも、保護者や地域住民の対応が増えたと回答

する小学校教師の割合は74.9%と高い数字を表しています。」という前文を入れ、その後に関次のような項目の幾つかの質問をした。

①保護者の言動で傷ついた内容と頻度

教師が保護者から受けた言動で傷ついた内容については、「対処に困るクレーム」「対処に困る要求」「クレームや要求を伴わないが対処に困る言動」の3つに大別し、更に次の8つに細分化した。

ア、「対処に困るクレーム」

忠井俊明氏は、クレマーの種類について次のように述べている。「教育現場にしばしば現れるクレマーはパーソナリティのタイプからシゾイド型とナルシスティック型に分類することができる。シゾイド型クレマーは彼らが体験した出来事を常に悪意あるものとして感じる傾向をもっている。(中略)一方、ナルシスティック型クレマーは教師の対応の適切さの是非といったような水掛け論に終始するような巧妙な問題にクレームをつけることが多い。」<sup>(3)</sup>

本研究においても、忠井氏の理論をもとに、保護者から教師や学校に向けられるクレームを

次の2つに分けた。

- ・シゾイド型クレマーによるクレーム
  - ・ナルシスティック型クレマーによるクレーム
- イ、「対処に困る要求」

保護者の要求する内容が学校教育に関係あるかないかで次の2つに分けた。

- ・教育とは無関係な内容
- ・学校教育に関係する内容

ウ、「クレームや要求を伴わないが対処に困る言動」

子育ての仕方に放棄や怠慢がある場合と、逆に過保護や過干渉を含めて子育ての仕方に誤解や曲解がある場合とで、次の2つに分けた。

- ・子育ての放棄、怠慢
- ・子育ての誤解、曲解

また、教師や学校に対する攻撃言動が意図的に行われたものか、無意図的に行われたものかどうかで、次の2つに分けた。

- ・教師や学校への攻撃言動（意図的だと思われるもの）
- ・教師や学校への非常識言動（無意図的だと思われるもの）

これらの視点に基づいて整理したのが〈表1〉、集計したのが次頁の〈表2〉である。

〈表1：保護者の利己的な言動分類〉

3つの大別	8つの細分化	定義	言動例
対処に困るクレーム	シゾイド型クレマーによるクレーム	体験した出来事を常に悪意あるものとして感じる傾向	・実際にはないのに子どもがいじめを受けていると認識する
	ナルシスティック型クレマーによるクレーム	他者を打ちのめすことで他者より優れている自己を証明	・教師の対応の不適切さなど巧妙な問題にクレームをつける
対処に困る要求	教育とは無関係な内容	学校教育や養育とは無関係なことを要求	・お金を貸して欲しい ・保険に入って欲しい
	学校教育に関係する内容	教育に関係していても自分勝手な事を要求	・学芸会で主役を希望 ・自分の子だけ優遇希望
クレームや要求を伴わないが対処に困る言動	子育ての放棄、怠慢	自分の子どもを養育する義務の放棄、怠慢	・給食費の未払い ・欠席の連絡をしない
	子育ての誤解、曲解	過保護、過干渉、偏った教育観による養育	・小さな怪我で大騒ぎ ・子どもの非を認めない
	教師や学校への攻撃言動	教師の人格を意図的に傷つけるような言動	・真夜中に教師宅に電話 ・教師の名を呼び捨て
	教師や学校への非常識言動	大人として人間としてのマナーに欠けた言動	・運動会での飲酒、喫煙 ・授業参観中のお喋り

〈表2：保護者の言動で傷ついた程度と頻度〉

3つの大別	8つの細分化	傷ついた程度	とても傷つく	少し傷つく	あまり傷つかない	全く傷つかない	N
		利己的な言動の頻度					
対処に困るクレーム	シゾイド型クレーマーによるクレーム	多く経験した	21	5	2	0	28
		少し経験した	126	100	28	5	259
		あまり経験していない	40	65	27	0	132
		経験がない	33	47	20	5	105
		N	220	217	77	10	524
	ナルシスティック型クレーマーによるクレーム	多く経験した	39	10	3	0	52
		少し経験した	115	65	19	4	203
		あまり経験していない	59	56	13	1	129
		経験がない	66	46	23	5	140
		N	279	177	58	10	524
対処に困る要求	教育とは無関係な内容	多く経験した	7	2	1	0	10
		少し経験した	18	22	34	17	91
		あまり経験していない	17	19	54	26	116
		経験がない	40	44	125	98	307
		N	82	87	214	141	524
	学校教育に関係する内容	多く経験した	12	4	5	2	23
		少し経験した	29	49	53	26	157
		あまり経験していない	19	50	82	22	173
		経験がない	32	33	63	43	171
		N	92	136	203	93	524
クレームや要求を伴わないが対処に困る言動	子育ての放棄、怠慢	多く経験した	26	14	12	3	55
		少し経験した	78	125	65	17	285
		あまり経験していない	23	45	28	5	101
		経験がない	22	31	22	8	83
		N	149	215	127	33	524
	子育ての誤解、曲解	多く経験した	36	17	6	2	61
		少し経験した	151	92	39	5	287
		あまり経験していない	49	47	17	2	115
		経験がない	14	25	17	5	61
		N	250	181	79	14	524
	教師や学校への攻撃言動	多く経験した	34	3	1	0	38
		少し経験した	152	18	6	4	180
		あまり経験していない	105	26	9	1	141
		経験がない	119	32	12	2	165
		N	410	79	28	7	524
	教師や学校への非常識言動	多く経験した	27	28	18	5	78
		少し経験した	65	122	51	10	248
		あまり経験していない	23	51	41	9	124
		経験がない	15	32	18	9	74
		N	130	233	128	33	524

保護者の利己的な言動に傷ついた程度については、「先生が次のような経験をされた場合、どのようにお感じになりますか、またはなると思いますか。」と質問し、利己的な言動を受けた頻度については、「次のような経験について、先生はどの程度経験されたことがありますか。」と質問した。それぞれ分けて質問し、後でクロス集計するという方法を取った。また、数字については実数を記載した。

### ②利己的な言動増加がもたらす仕事への支障

「保護者の利己的な言動増加は、教師としての仕事に支障を与えることがありますか。」と質問したところ、524人中、「はい」という回答が510人（約97%）、「いいえ」という回答が14人（約3%）という結果であった。

また、「はい」と回答した510人に対して、「具体的には、どのような面で支障が出たことがありますでしょうか。該当する番号に○を付けて下さい。（複数回答可）」という選択肢による質問をした。また、「8.その他」を選択した場合は、その理由を記述してもらった。すると〈表3〉のような結果となった。

また、「8.その他」を選択した19名が、教師としての仕事に支障が出た内容として、次のように記述していた。

〈表3：具体的な仕事への支障内容〉

(%部分の算出方法=件/510、小数第3位四捨五入)

具体的に支障が出た仕事の内容	件	%
1. 保護者の対応に時間がかかる	390	76
2. 精神的にまいってしまい気が晴れない	381	75
3. 保護者への説明責任を過度に気にする	232	45
4. 子どもへの指導を遠慮してしまう	238	47
5. 懇談会等で率直に事例を伝えられない	117	23
6. 他の学級と違うことに過敏になる	84	16
7. 宿題の量の増減など教育活動で保護者の意向を受けすぎる面が出てしまう	76	15
8. その他( )	19	4

- ・やる気がなくなる（2人）
- ・その保護者を必要以上に意識する（2人）
- ・エネルギーがいる。子どもに罪はないが、どうしても子どもに意識がいく。
- ・保護者同士が感情的になって、当該の子どもたちに好ましくない影響を与える。
- ・子どもの考え方にかなりの影響が出てくる。
- ・その保護者の子どものケアに対応する人と時間がかかる（打ち合わせ等）
- ・保護者にどのように対応していくと子どもにとって良いか、共通理解を図る時間がかかる
- ・仕事を辞めたくなる。
- ・精神的に疲れ、体重が10kg減り、病気になった。
- ・休日にも気になって、考えるだけで疲弊する。
- ・一部の保護者の勝手な解釈によって真意が見えなくなる。だから保護者同士の不信感につながる。
- ・教材研究に費やす時間がなくなる。
- ・他の親に、ある事（実際にはない事）、ない事言いふらすので、説明が面倒になる。
- ・怪我への対応は慎重に、過度になるほどでも良いと対応する。
- ・仕事が増える。
- ・無難な対応に終始し、真実を語らなくなった。
- ・勤務時間外に対応しなければならず、電話も父親が帰宅後の夜10時過ぎから12時までと疲れる。

### ③現行の対応策の課題

「保護者の利己的な言動に対して、近年多くの自治体が対応策を実施しています。主な対策としては、苦情対応マニュアルの作成、対応専門チームの組織、弁護士や臨床心理士の活用などがありますが、将来にわたって保護者の利己的な言動が減る方策だと思いますか。」という質問に対して、524人中、「はい」という回答が245人（約47%）、「いいえ」という回答が279人

(約53%) という結果であった。

また、「いいえ」と回答した279人に対して、「なぜ、このような取り組みが、将来にわたって保護者の利己的な言動が減る方策だとは考えられないのでしょうか。」という自由記述でこたえる質問をしたところ、下記〈表4〉のような結果となった。

〈表4：現行対応策が将来的に効果の低い理由〉

効果が低いと考えられる理由	実数
保護者の意識改革や心を変える方策ではない	42
利己的言動の原因を取り除く方法ではない	37
対症療法的で長期的な解決策になっていない	35
社会の変化の問題が大きい(地域の崩壊等)	28
保護者の人間性の問題が大きい	22
保護者の要求や要望が多岐にわたり難しい	16
保護者の感覚や考え方が変化している	13
保護者との対話をもっと必要である	10
教師が対応策を活用しようとしていない	5
教師の力量不足など、教師自身に問題がある	4
保護者の心の病気がある	4
対応策が効果をあげている実感がない	4
教師に何の権限もない	3

(実数が3未満の理由については省略した)

### (3) 調査結果から分かる傾向

#### ① 保護者の言動で傷ついた程度と頻度

アンケート結果を、保護者の言動で傷ついた程度の総計、利己的な言動を受けた頻度の総計、両者のクロス集計の3方向から見た結果、次のような傾向が明らかになった。

【保護者の言動で傷ついた程度の総計より】

- ・『対処に困る要求』の中でも、「教育とは無関係な内容」は、「あまり傷つかない」が214名、「全く傷つかない」が141名と、教師の心の傷になりにくい。
- ・「とても傷つく」のは、「教師や学校への攻撃言動」が410名と最も多い。
- ・「とても傷つく」「少し傷つく」割合が約70%

を越えているのは、『対処に困るクレーム』と『クレームや要求を伴わないが対処に困る言動』である。

【利己的な言動を受けた頻度の総計より】

- ・保護者の利己的な言動の中で、「多く経験した」「少し経験した」を合わせて上位に来るのは、「子育ての放棄、怠慢」340人、「子育ての誤解、曲解」338人、「教師や学校の非常識言動」326人である。反対に、『対処に困る要求』の中でも「教育とは無関係な内容」については101人と少ない数字になっている。
- ・「多く経験した」のは、「教師や学校に対する非常識言動」が78人と最も多い。

【両者のクロス集計より】

- ・「とても傷つく」「多く経験した」をクロスさせた数字が最も多いのは、「ナルシスティック型クレーマーによるクレーム」である。
- ・「経験がない」にも関わらず「とても傷つく」と回答した中で最も多いのは、「教師や学校への攻撃言動」である。
- ・「経験がない」上に「全く傷つかない」と回答した中で最も多いのは、『対処に困る要求』の「教育とは無関係な内容」である。
- ・「多く経験した」「少し経験した」中で「とても傷ついた」「少し傷ついた」としたのは、多い順に「シゾイド型クレーマーによるクレーム」「子育ての放棄、怠慢」「教師や学校への非常識言動」である。

また、教師が心の傷を受けるかどうかは、どんな種類の言動を受けるかどうにかかっている、利己的な言動を受けた頻度との因果関係は、特に認められなかった。

#### ② 利己的な言動増加がもたらす仕事への支障

- ・約97%の教師が、保護者の利己的な言動が仕事に支障を与えていると指摘している。保護者の配慮の無さが教育活動を停滞させる一因となっていると言っても過言ではない。

- ・具体的に支障を与えている事柄の中でも、「保護者の対応に時間がかかる」が76%、「精神的にまいってしまい気が晴れない」が75%と、高い比率を示している。「子どもへの指導を遠慮してしまう」「保護者への説明責任を過度に意識する」も半数に近い比率を示すなど、子どもを教育する目的とはおよそ遠いような要因で、教師の仕事に支障を与えている。
- ・その他の中で、「子どもに罪はないが、どうしても子どもに意識がいく」とあるように、保護者との関係の悪化が子どもとの関係悪化にもつながる懸念がされる。

### ③ 現行の対応策の課題

- ・現行の対応策が、将来にわたって保護者の利己的な言動を減らす方策かどうかという問いに対して、評価する声と評価しない声とは、およそ半々である。
- ・現行の対応策は、目の前で起こっている事例を解決するには大きな成果を期待できるであろう。だが、「いいえ」と回答した上位の理由、「保護者の意識改革や心を変える方策ではない」「利己的な言動の原因を取り除く方法ではない」「対症療法的で長期的な解決策になっていない」「社会の変化の問題が大きい（地域の崩壊等）」等からも分かるように、将来にわたって保護者の利己的な言動が減る方策かどうかという課題も提示されている。

## (4) 考察

教師が心の傷を受ける程度と頻度を見ていくと、利己的な言動を受けた経験がない場合、「とても傷つく」としたのは、「教師や学校への攻撃言動」が最多である。一方、「全く傷つかない」のは、「教育とは無関係な対処に困る要求」が最多であった。ここから、学校教育に関することで、教師が保護者から攻撃を受けた際に、心の傷を受ける様子が分かる。

また、「保護者の利己的な言動を経験した」中で「傷ついた」としたのは、多い順に「シゾイド型クレマーによるクレーム」「子育ての放棄、怠慢」であることから、加えて、保護者が子どもの養育を放棄、怠慢したときに教師が傷つくことも分かる。

では、教師が保護者から攻撃を受けたり、目の前で不幸せな思いをする子どもを見たりして心の傷を受けることとは、どのような状態を指すのであろうか。飛鳥井望（2007）は、心の傷とトラウマとを同義語ととらえ、次のように述べている。「トラウマとは、簡単にいうと心の傷です。不安や恐怖などの一時的な感情とは違って、心に傷がつき、それが残り続けることをいいます。」<sup>(4)</sup> また、精神科医の中島一憲（2003）も、「現場教師の2～3割が病院を受診してもおかしくない軽度の抑うつ状態にあることが明らかにされています。」<sup>(5)</sup> と警鐘を鳴らし、その原因として、「以前と比較して保護者の要求が肥大化してきたことも、教師にとって新たなストレスの要因になっています。」<sup>(6)</sup> と、保護者との歪な関係を指摘している。

この状態では、教師の仕事に支障が出るのも当然である。「保護者の対応に時間がかかる」「保護者への説明責任を過度に気にする」ことは、教師にとってストレスそのものであろう。「精神的にまいってしまい気が晴れない」状態に至っては、心の傷が残り続けている可能性も示唆している。

では、そうした状況に対応するための現行の対応策は、十分なものであろうか。18の政令指定都市のうち、苦情対応マニュアルの作成が3市に、対応専門チームの組織が9市に、弁護士や臨床心理士の活用が4市に見られることを考えれば、確かに一定の成果はあるのだろう。しかし、現行の対応策はどうしても事が起こってからという対症療法的なものであり、保護者の利己的な言動を将来にわたって減らしていくよ

うな根本的な対策としては課題が残る。特に、『クレームや要求を伴わないが対処に困る言動』については、事が起こっていないため、現行の対応策では対処のしようがない。

そこで新たな対応策に求められる要素として、保護者の意識や心を変えるような、また社会の変化や問題に対応できるような、利己的な言動の原因を取り除くような方策が必要だと考える。また、保護者の利己的な言動により、教師としての仕事に支障が出ないようにという要件も加わってくる。

具体的な新たな対応策として、私はスクールコミュニティの構築、つまり学校中核型学社融合の取り組みが必要だと考える。例えば、結城光夫(2000)は、学校中核型の学社融合の具体的なイメージとして、「地域の人々が学校支援ボランティアや特別非常勤講師として積極的に学校での教育活動に参加し教員を支援したり、生き生きとしたPTA活動の展開を担ったり、地域の社会教育施設などが学校と共同で事業を行ったりする」<sup>(7)</sup>と例示しながら説明している。保護者や地域住民を学校の応援団として迎え入れるという発想である。地域と保護者または地域住民、学校と家庭または地域社会は対立する関係ではなく、学校を中核として、共に支え合う関係になっていけば良いという考え方である。

教師の心の傷から現行の対応策の課題までをアンケートにより調査したが、学校中核型学社融合は問題点や課題に対応する一つのモデルと成りうると判断する。

### 3. 学校中核型学社融合の対応策

学校中核型学社融合の取り組みが、現行の「モンスターペアレント」の対応策の問題点や課題を解決するものと考え、その成果を見ることで、仮説の妥当性を検証していくものとする。

学校中核型の学社融合の取り組みには様々な

ものがあるが、ここで検証の対象とするのは、コミュニティスクールである。文部科学省は、コミュニティスクール導入の目的を次のように説明している。

「学校運営協議会を通じて、保護者や地域の皆さんが一定の権限と責任を持って学校運営に参画することにより、そのニーズを迅速かつ的確に学校運営に反映させるとともに、学校・家庭・地域社会が一体となってより良い教育の実現に取り組みることがこの制度のねらいです。また、地域の創意工夫を活かした特色ある学校づくりが進むことで、地域全体の活性化も期待されます。」<sup>(8)</sup> また、学校運営協議会の権限について次のようにしている。「コミュニティスクールにおいては、学校運営の基盤である教育課程や教職員配置について、保護者や地域の皆さんが責任と権限を持って意見を述べることで制度的に保障され、その意見を踏まえた学校運営が進められることとなります。」<sup>(9)</sup>

このように、コミュニティスクールは学校を中核とした学社融合の理念を持ち、平成21年4月1日現在で、全国で478校が指定されるほどの規模を持つものであるが故、今回検証の対象とした。また、調査は下記のようにしぼって行った。

#### (1) 調査の概要

##### ①調査対象

平成20年4月1日までにコミュニティスクールの指定を教育委員会より受けた小学校のうち、平成21年度に文部科学省から調査研究の委託を受けた全国の55校の小学校  
回答率89%、有効回答49

※コミュニティスクールの指定を受けてから取り組みの成果が見られるようになる為には、一定の時間が必要だと考え、平成20年4月1日までに教育委員会より指定を受けた小学校という条件とした。



②調査方法

制限応答式質問による電話インタビュー

③調査時期

2009年7月から2009年8月

④調査内容

「地域に開かれ、地域に支えられる学校づくりを目指すことで、保護者の学校や教師に対する利己的な言動は、以前と比べてどのようになつたと感じられますか。」という質問に対して、「増えた」「変わらない」「減った」の中から選択してもらうという方法を取つた。

(2) 調査結果

回答の選択肢としては、保護者の利己的な言動が「増えた」「変わらない」「減った」の3つを準備したが、回答の中には「以前から利己的言動はない」「分からない」というものもあり、次の〈表5〉のような結果となつた。またインタビューは該当する全国55校の小学校に行つたが、無回答は6校であり、有効回答数は49であった。

コミュニティスクールの取り組みを通して保護者の「利己的な言動が減った」とする数が33と最も多く、全体の約67% (33/49) にその成果が見られている。

「以前から特に保護者の利己的な言動はない」「分からない」と回答した、合わせて6校を除いた比率でも、約77% (33/43) と、非常に高い数字である。

また、保護者の「利己的な言動が減った」と

回答した33校のうち、13校がインタビュー後に進んでその理由を述べている。これは回答を促したのではなく、あくまでも自主的に述べた結果である。

- ・コーディネーターが学校と地域の間に入るから。
- ・地域の人が学校と保護者の間に入ってくれる。
- ・年輩の方が学校に入ること、若い保護者に子育てを教える機会になっている。
- ・近所の目があるから。
- ・コミュニティスクールの存在が抑止力になる。
- ・学校に足を運ぶ保護者の理解が確実に深まった。
- ・保護者が学校に関わることで、無責任な言動が減ってきた。
- ・学校菜園の手入れなど、地域の方が朝から学校の中に入ってしてくれるので、学校の理解者が増えてきている。
- ・子どもたちと多くの保護者との関わりが増えた。
- ・学校運営協議会を通して、保護者の学校に対する理解が深まったから。
- ・学校運営協議会のメンバーが他の保護者に話をしてくれることで、解決する事例がある。
- ・学校運営協議会で意見をいただき、対応もして下さるので、保護者の不満が吸収される。
- ・コミュニティスクールに関わる方からの利己的な言動は減少している。しかし、関われない方の部分まで解決しているとは言えない。

(3) 調査結果から分かる傾向

最も注目すべきは、コミュニティスクールの取り組みを通して「保護者の利己的な言動が減った」とする学校が33校と多いことである。どの学校についても、学校運営協議会を設置してコミュニティスクールを運営しているのであり、特に「モンスターペアレント」の対策をしている訳ではない。しかし、結果として、保護

〈表5：コミュニティスクールの成果〉

回答の内容	校数
保護者の利己的な言動が増えた	0
変わらない	10
保護者の利己的な言動が減った	33
以前から特に保護者の利己的な言動はない	4
分からない	2
合計	49

者の利己的な言動が減ることとなっているのである。

その理由は、自由回答から見てとれる。学校運営協議会や地域の方を通じて、または保護者自身の学校教育への参加により、学校と家庭、そして教師と保護者の間にある壁が取り除かれているからであろう。

#### (4) 考察

学社融合を必要とする背景について、伊藤俊夫(2000)は、次のように述べている。「学校が、いじめ、不登校、学級崩壊などに関し対症療法ではなく、病的解決を求めている。また、家庭や地域が担当すべき教育まで学校が抱え込んで肥大化し、スリム化が喫緊の課題になっていること」「モラルの低下が指摘されている大人たちに、学社融合の事業に参画する機会を提供し、実践活動による自己変革を期待していること」<sup>(10)</sup>などが背景であるとし、「学社融合は教師の仕事が増えるのではなく、むしろ、仕事の合理化・効率化である。」<sup>(11)</sup>としている。

学校中核型学社融合の一つの形であるコミュニティスクールに、なぜ保護者の利己的な言動を減らす効果があったかという点、対症療法的でない解決の仕方を求めたり、保護者の自己変革を期待したりするような理念があるからだと推測される。

コミュニティスクールとは、先述したが、特に「モンスターペアレント」の対応策として誕生した訳ではない。しかし、調査49校中、33校に「利己的な言動が減った」という結果が出ていることから、学校中核型の対応策がある一定の効果を生んでいると言えるのではないかと考えている。現行の対応策のように、実際に保護者の利己的な言動があってから動き出すものも必要であろう。だが、将来にわたって保護者の利己的な言動を減らしていく方策が必要なのではないだろうか。

コミュニティスクールをはじめとした学校中核型学社融合の実現は、このように保護者の意識を変えたり、地域の崩壊などの社会の変化に対応したりする可能性を持つものである。そうした意味からすると、従来の「モンスターペアレント」の対応策だけでは不十分だった課題にもある程度こたえている。「モンスターペアレント」の対応策として、新たな組織づくりをしたり、冊子づくりをしたりする必要性がなく、今ある組織を基本的に活用していけば実現できると考えられる点にも汎用性があると言えるであろう。

#### 4. おわりに

今日、「モンスターペアレント」というセンセーショナルな言葉の響きに反応し、報道等でも教育現場の悲惨な現状を伝えることに執心しているように思える。だが、大切なのは、現状の悲惨さを伝えることだけではなく、教師が保護者の利己的な言動に傷つき、教育活動に支障を与えているという問題を解決していくことである。

本稿に先立ち、筆者は「モンスターペアレント」の誕生背景について、「何らかの社会変動があり、保護者の学校に対する信頼感の低下や利己的な言動を特別なこととは思わない風潮を呼び起こすこととなった。その結果、個人で、また親しいグループでいても社会から孤立している保護者(たち)は、真っ先にその影響を受けることとなった。」<sup>(12)</sup>という傾向を明らかにした。この考えが正しいものであるとするならば、低下した信頼を取り戻し、教師や学校に対して利己的な言動を慎もうという気持ちを、該当する保護者に持ってもらうことは急務である。それも何か事が起こってからではなく、日常的にである。

確かに、教師と保護者とが子どもを育てると

いう目的のもと、一つの仲間になれば、事は簡単である。小野田正利(2008)も、「親も学校も、そして、社会もちょっと冷静になってみていただけませんか。一瞬で構いません。怒った自分、相手がなぜそうしているのか。ほんの少し想像してみるだけで、不必要なイラだちは収まるかもしれません。」<sup>(13)</sup>と、教師と保護者とが結び合えるようにメッセージを送っている。

だが、それでも現実的には、利己的な言動を教師にぶつける保護者、それを受ける教師という構図は、なかなか変わらない。相互扶助関係になりにくい現状を、Michael Papworth(2006)は、次のように言っている。「子どもに関する問題を、本来そうである以上に、学校での教育の問題や教師の能力に帰属させる保護者もいるであろう。このような場合には、教員はみずからの力の及ぶ範囲を超えて責任を負うことになり、解決困難で統制不可能な課題を背負い続けることになる。このような境遇におかれた教員が大きなストレスに悩まされることは容易に想像できるであろう。」<sup>(14)</sup> 現行の対応策も、こうした課題に応えにくい側面が残っている。アンケートの調査結果でも述べたが、「保護者の意識改革や心を変える方策ではない」「利己的言動の原因を取り除く方法ではない」「対症療法的で長期的な解決策になっていない」「社会の変化の問題が大きい」等の課題が見られるからである。

だが、そうした課題に対して、コミュニティスクールの実現は、将来にわたって保護者の利己的な言動を減らすかも知れないという可能性を示した。ただ、決して『学校中核型学社融合＝コミュニティスクール』と固執している訳ではない。その他の方策として、例えば、文部科学省の推進する学校支援地域本部事業に着目することも考えられる。学校支援地域本部事業とは、「学校と地域との連携・協力体制を構築し、地域全体で学校を支え、子どもたちを健やかにはぐくむことを目指し、学校支援地域本部をは

じめ、地域住民のボランティア活動等による積極的な学校支援の取組を促す。こうした取組の成果をすべての市町村に周知し、共有すること等を通じ、広く全国の中学校区で地域が学校を支援する仕組みづくりが実施されるよう促す。あわせて、民間団体を活用し、学校と地域住民や民間団体をつなぐコーディネーター育成の取組を促す。」<sup>(15)</sup>ものである。取り組む方法等が違うだけで、根本的な理念はコミュニティスクールと同様、学社融合の精神である。学社融合の精神こそが、保護者の意識や心を変え、長期的に教師と保護者、学校と家庭とを結び、社会の変化等の問題にも対処していけるのではないだろうか。

先ほども述べたが、コミュニティスクールをはじめとして、学校現場で広がりを見せている、学校中核型の学社融合の取り組みは、決して「モンスターペアレント」対策を意識して講じられたものではない。しかし、だからこそ、教師の負担もなく、自然に教育現場で効果を上げていくことが期待できる。だからこそ、日常的に取り組めるという期待ができる。だからこそ、特別な対応策に身構える必要がなく、教師の安心感を生むという期待もできる。

今ある組織や考え方を活用し、将来にわたって保護者の利己的な言動を減らしていくという発想そのものが、現行の「モンスターペアレント」の対応策に関するパラダイム転換である。

#### 【注】

- (1) 向山洋一編『教室ツーウェイ』明治図書 2007・8、p.9
- (2) 尾木直樹『バカ親って言うな!』角川書店、2008、p.205
- (3) 忠井俊明「極端なクレームをつけてくる親」『児童心理』NO860、金子書房、2007・6、pp.89-90

- (4) 飛鳥井望『PTSDとトラウマのすべてがわかる本』講談社、2007、p.10
- (5) 中島一憲『先生が壊れていく』東弘社、2003、p.16
- (6) 同書、p.17
- (7) 伊藤俊夫編『学社融合』全日本社会教育連合会、2000、p.117
- (8) 文部科学省「コミュニティ・スクールをめぐる20のQ&A」  
[http://www.mext.jp/a\\_menu/shotou/community/04122701/004/002.htm](http://www.mext.jp/a_menu/shotou/community/04122701/004/002.htm)  
2009、8/24アクセス
- (9) 同http
- (10) 伊藤、前掲書、p.138
- (11) 同書、p.139
- (12) 齋藤浩「親たちはなぜ自制が利かなくなったのか」『佛教大学教育学部学会紀要』No 8、2009、p.124
- (13) 小野田正利『親はモンスターじゃない!』学事出版、2008、p.197
- (14) Michael Papworth 著、石田雅人 漆原宏次 実光由里子 林照子訳『教師・教育関係者のためのストレス撃退法』北大路書房、2006、pp.6-7
- (15) 文部科学省「学校支援地域本部事業」  
[http://www.mext.jp/a\\_menu/hyouka/kekka/08100105/009.htm](http://www.mext.jp/a_menu/hyouka/kekka/08100105/009.htm)  
2009、8/24アクセス

#### 【参考文献】

- ・ 諏訪哲二『オレ様化する子どもたち』中央公論、2005
- ・ 小野田正利『悲鳴をあげる学校』旬報社、2006
- ・ 尾木直樹『教師格差』角川書店、2007
- ・ 諏訪哲二『学校のモンスター』中央公論、2007
- ・ 本間正人『モンスター・ペアレント』中経出版、2007
- ・ 藤原智美『暴走老人!』文藝春秋、2007
- ・ 香山リカ『キレル大人はなぜ増えた』朝日新書、2008
- ・ 多賀幹子『親たちの暴走』朝日新書、2008
- ・ 山脇由貴子『モンスターペアレントの正体』中央法規、2008
- ・ 諸富祥彦『モンスターペアレント!?!』アスペクト、2008